慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『批評』総目次と解説
Sub Title	The contents and comments of the "Hihyo"
Author	中村, 勝範(Nakamura, Katsunori)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1962
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.35, No.1 (1962. 1) ,p.87- 100
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19620115-0087

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

資料

「批評」総目次と解説

中村勝範

解説

一　『批評』は大正八年三月一日に創刊号を発行し、翌九年一二月一日に第二二号をだしてその歴史を閉じた。雑誌の大きさは縦二二・七、横一五・五糎であつた。頁数は一定でなく、三五頁を最小の頁数とし、六七頁を最大の頁数としていた。編輯兼発行人兼印刷人の名儀は終始尾崎士郎になつているが、その終刊号にみえるごとく主として「執筆もし編輯」（「読者諸君に」）もしてきたのは室伏高信であつた。創刊以来、一年有半、「堅実な基礎ができかゝつてきた」（右同）のに、改造社のすすめにより室伏が欧米遊学の途につくため終刊のやむなきにいたつたものであつた。発行部数は「一号は僅に一千部を印刷したに過ぎませんでした。第二号は二千部に過ぎませんでした。第三号から三千部に、ある時は二千部にある時は四千五百部をそして大部分は三千部を印刷しました」（右同）という状態であつた。

主たる執筆者は室伏高信、甲野哲二、尾崎士郎、森恪、倉橋藤治郎、賀川豊彦らであり、一回限りの執筆者に田中純、横井四郎、河田嗣郎、竹森一則、和田むめお、山内茂男、尾瀬敬正という人々の名がみえる。号数の割合いに執筆者の範囲が限られている。室伏、甲野、森、尾崎の四名の同人雑誌であつたといえよう。

この雑誌が創刊された大正八年三月ごろは「民主主義の思想が政治的から社会的へと、漸く回転を始めようとしつゝあつた時」（「読者諸君に」）で、「この機運に莅んで言論は盛んに興りました。恐らくこの頃から約一年ばかりの間位で、言論の勃興したことは、私たちの日本で見ることができなかつたことと存じます。またこの時代に於いてのごとく、私たち日本人の政治思想が発達もされ、革新も

されたことは前例のないことだと思ひます」（右同）といわれる時代であつた。このなかにあつて『批評』は「聊か新機運の指導に対して寄与するところがあつた」（右同）と室伏らは考えたが、この「二ケ年に近い間、『批評』は終始一貫しての立場を維持」（右同）してきたのであつた。

二　ところで『批評』の終始一貫した立場とは何か。この点については創刊の辞ともいうべきつぎの文字がよくそれを表現していると思うので引用しよう。

▲「批評」の立場はデモクラシーの立場です。

▲その立場からデモクラシー自身についての研究をします。またその立場から政治、社会、教育、文芸を批評します。

▲デモクラシーは政治の領分にだけあるのではなくして、われ等の生活の一切を規定する道徳的本能であります。その「道徳的本能」を体現するものが「批評」であります。

▲「批評」は日本の改造を要求します。新日本の創造のために働きます。

▲「批評」は主義をもつて立ちます。それ故に名士だとか博士だとかの意見は成るべく掲載しません。私ども同人の主張をもつて全巻を横溢させます。

▲私どもは、私どもの力によつて日本を改造して見せるといふほどの己惚れと決心とをもつて立ちます。私どもはカール・マルクスとはその主張を同じくしない点が沢山あります。けれどもマルクスが「新ライン新聞」を起したと同じ決心をもつて立ちます。

▲私どもが日本の皇室的伝統に忠誠であることは、本号中の「民主主義と共和主義」によつても明らかです。

▲それとともに私どもは民衆に対して何人よりも多く且つより深く忠誠でありたいと思ひます。然り、より深くです。より深くといふことは、現在の民衆的表現よりも超越してゐる場合のあることの意味です。

▲私どもは民衆を友とします。民衆を深きところに友とします。深きところに民衆を見るものにとつては、民衆は「多数決」ではなく、「米騒動」ではなくして、真に偉大なる道徳であります。

▲私どもはその偉大なる道徳としての民衆を理解します。さうしてその民衆の父ともなり、児ともなり、姉妹ともなります。

▲だから社会問題、労働問題は、私どもによつては最も重大なものとして感んぜられます。教育も、文芸も、政治も、その意味からして重大です。

▲だから私どもは民主主義に反対するあらゆるものに非難を加へます。無政府主義に非難を加へることも勿論です。社会主義については厳正な批評を加へます。（「編輯局より」）

このあと、一〇行ほどつづくが、それは『批評』の立場とは関係ないのではぶくことにする。

三　つまり『批評』は大正デモクラシー期において、デモクラシーの立場を旗印にして発刊されたものであつた。しかしそのデモクラシーは少くとも二つの点において特徴をもつていた。

その一つは「日本の皇室的伝統に忠誠」であるという点であつた。この皇室的伝統に忠誠をつくすという点において「若しデモクラシーの主義が絶対的に共和政治を要求するものであるとなし、従つて皇室の観念と相容れないものであるとすれば、日本においてデモクラシーを主張することは、皇室を尊崇する私どもの心もちに反逆するもの」（「民主主義と共和主義」）であるというほど熱烈であつた。これはおかしなことである。少くともこの当時の天皇制はデモクラシーと相容れる面より、相容れない面の方が多かつたはずである。それにもかかわらず「皇室的伝統」を守ろうとすることは、デモクラシーが根本から解決しなくてはならぬ肝心なものを初めから避けていることになる。

なぜこういう考えになるかというと「人民のための、人民による、人民の政治」という立場で民主主義を理解せず、これを「精神」として理解しているところに原因があつた。「デモクラシーとは政治、社会、産業のある形式ではなくして、それ等に通ずる奥深き精神であります。それゆえに如何なる形において発現するともデモクラシーの精神を表現するものである以上は、それは一切デモクラシーそのものであります」（右同）。ひるがえつて日本の皇室をみるに、それは「何人が企てたるものでもなく、何人が約束したるものでもなく、その皇室の徳的卓越によつて自然に生長したるものであります。従つて日本の皇室はその国民の心の価値の体現であり、その民族の歴史上における徳的価値の表徴であります」（右同）。すなわち民意も国民の感情もなにもかも皇室がこれらを体現しているのである。だから日本において皇室がいや栄えるということは、とりもなおさず日本のデモクラシーが発展していることになる。「日本においてデモクラシーがその国体と矛盾するものであるとするの思想は、このデモクラシーが心の質であることを解せざるものである、その上に、日本の皇室が、われ等の国民生活の卓越せる伝統tradition であることを理解せざる人々の言葉であります。国体は擁護せらるべきものではなく、自然に生長すべきものであります。皇室に対する忠愛の養成は国体の擁護なる思想によつて行はれるものではなく、人々がこの伝統に目醒めることであります。従つて自身の心について目醒めることであります。また従つて人々が真実なるデモクラシーについて目醒めることであります」（右同）というようにデモクラシーと国体とは矛盾しないことを強調している。

さて、右の考えだと改めて言論、集会、結社の自由だとか、あるいは普通選挙権の獲得などということは問題にされなくてよいわけである。民意を代表し、国民感情を代理する皇室のいや栄だけが問題にされればよいわけである。しかし室伏らはやはり、民主主義的な諸要求をかかげ、たとえば普通選挙権の獲得にたいする熱意とその理論は、大正デモクラシーの元祖吉野作造博士を上廻ることがある。「普通選挙とは、一切の古き日本を改造して日本特有の皇室的伝統のもとに、新日本を創造すること」（「吉野博士の誤謬を指摘して普通選挙の主義を論ず」）であると論じ、皇室尊崇の熱誠を披瀝する。がしかしその内容はかなり鋭いものを含んでいる。

選挙権をあたえられていない人民は社会的に平等の機会を与えられていないことであり、それは各人の与えられた天賦を発揚することができないばかりではなく、また最大多数の人民が貧困に苦しんでいるばかりではなく、それらの大多数の人民に対して、それらの人々の社会的義務 Social duty をつくすことの機会を与えないということになる。それは社会それ自身の進化と創造との要求を妨ぐることとなるのはもちろんである。われわれが最大多数の人民の階級――プロレタリア階級の利己心に満足を与えようとするのではない。「それ等の最大多数の人民に自由を与へるとともに、これ等の人民を真実なる社会組織のうちに組み入れようとすること」（「普通選挙運動」）が、普選の目的であるとした。しかし『批評』の普選論の特徴はそこにあるのではなく、それはつぎのような主張の中にある。『批評』の立場からすると、制限選挙制度を不合理であるとするのは、一〇円の納税資格を五円にし、三円にし、二円に引き下げることではない。これを五円にし、三円にし、二円にすることは、ただブルジョア階級の政治的膨脹を意味することである。ただ特権階級の膨脹を意味することである。その改造の意味は社会的または政治的不平等を除き去ることに一歩を進めることではなくしてその反対である。その反対にブルジョア階級を膨脹せしめることである。より具体的にいえば農民の有権者をふやすことになり、それは農民を基盤にするブルジョア勢力、保守勢力の勝利を意味する。こういう方向にではなくて、都市に集中した無産者に選挙権を与えることが選挙権拡張の要求そのものではないか。この痛切なる要求に耳をかさずして、地方の農民に選挙権を拡張していくことに、果して何の合理的の根拠があるか。だから「われわれはこれ等の不当なる一切の要求に反対する。政友会の案にも、憲政会の案にも、国民党の案にも反対する。それ等のブルジョア党または農民党の一切の提案に反対する」（右同）として納税による制限のない完全なる普選（男子に限るが）を要求するのである。この『批評』の立場からすれば吉野作造博士の普選も槍り玉に挙げられざるをえない。吉野博士は、

「今日までの政論の舞台において普通選挙の主張者ではない。私の承知してゐる範囲においては、その人は制限選挙の主張者であります。彼れが五円説を主張したことは私は忘れずにゐます。（中略）その人の民本主義とは、その人自身の註解によれば、選挙権の拡張といふことに帰着するもののやうであります」（「吉野博士の誤謬を指摘して普通選挙の主義を論ずこ」。この吉野理論批判は、同批判論文において、吉野理論中の数ヵ所の誤謬を指摘したことよりも重要であつた。しかしこの鋭い普選理論も「皇室的伝統」という枠の中のそれであつた。

以上が『批評』の立場からとなえられたデモクラシー理論の第一の特徴であつた。では第二の特徴は何かといえば、それは「現在の民衆的表現より超越してゐる場合」もあるというデモクラシーであり、言葉をかえていえば「民衆は『多数決』ではなく、『米騒動』ではなくして」真に偉大なる道徳である、という表現にみられるように、生きている、あるいは現実に存在するデモクラシーとか民衆ではなくて『批評』の立場からする特殊理想型としてのデモクラシーであり、民衆であるということである。これを『批評』の論文のなかからひろつて「民主主義とは私にはたゞ美しきものであるとして見えます。（中略）私は民主主義について想像に耽つてゐる時に、私自身を純白なものとすることができます。私にとつては、民主主義とは真善美そのものであります」（「民主主義史論の序」）というところまではかりについていけるとしても、これが民主主義は「人間の集合といふことでもなく、革命でもなく、暴動でもなく、多数決でもなく、代議政体でもなく、立法部でもなく、ヂュリーでもなく、たゞスピリットであり、またアトモスフヰアであります」（右同）といわれると不可解になつてくる。

かように民主主義の具体的な内容一つ一つをとりあげてみると、かなり鋭く、進歩した考えを含みながら、さて本質論、基本論にもどると皇室的伝統なるものに手桎足桎されてしまうか、わけのわからぬ冗弁に終つているのが『批評』のデモクラシー理論であつた。

四　『批評』同人にとつて社会問題、労働問題は最も重大なる関心事であつた。しかし彼等はもとより社会主義者ではなかつた。「『批評』は社会主義に対しては第三者の立場です。第三者の立場から厳正な批判を加へます」（第三号「『批評』より」）どいう態度をとつた。この立場から「無政府主義の批判」（第四号）、「国家社会主義の批判」（第五号）、「サンヂカリズムの批判」（第六号）、「ギルド・ソーシヤリズムとその批判」（第七号）、「労働組合主義の批判」（第八号）、「レーニンの著書を読む」（第九号）、「ギルド社会主義研究」（第一二号）、「ギルド社会主義の創生」（第一四号）、「レーニン主義批評」（第二〇号）その他毎号社会主義論、労働組合論を精力的に紹介しまた展開した。

『批評』はこのように各種の社会主義理論をなかば特集の型でつぎつぎと紹介しているが、彼等自身は「第三者の立場」でこれらを紹介しているだろうか。「われ〳〵は素より社会主義者ではない。或る種の社会主義に対してはそれに厳粛に反対するものであります。けれどもわれ等が社会主義者であると否とにかゝわらず、社会主義運動の権利を否認すべき何等の理由をもたない。少くとも国家社会主義の運動に対して、国家がこれを抑圧することは、その国家が資本主義の万能を理想とする国家であることを証明するものでなくてはならぬ」（「社会主義運動」）とみえるところから『批評』は国家社会主義に対しては同情的であり、「或る種の社会主義」に対しては「厳粛に反対する」ものであつたことがわかる。そして「厳粛に反対する「或る種の社会主義」はまず無政府主義であつた。彼等は「無政府主義のごとき不健全にして且つ思想的に可成り勢力あるものに対して、厳正な批判を与へることは極めて必要なものでなくてはならない」（第四号「『批評』より」）といつた。第二に「『批評』は素よりサンヂカリズムに反対」（第六号「『批評』より」）であつた。ギルド社会主義についてはしばしば論及されているが、「英国における一大流行のギルド・ソーシャリズムにしても」社会主義や（社会主義に対するものと彼等が考えていた）サンヂカリズムとともに、「不朽に亘つての、人間精神の救治となりうるであらうか」という疑問を彼等は抱いていた（第七号「『批評』より」）。これだけの予備知識をもつて、さらに一歩すすめて各社会主義理論に対する『批評』の立場を見ていこう。

五　まず国家社会主義に対する『批評』の立場であるが、彼等はこの国家社会主義には「ビスマーキアン国家社会主義」と「ステート・ソーシャリズム」の二種があつて前者には反対だが後者は支持する。「日本において国家社会主義を主張する人々は軍閥の一派または官僚の一派であります。その一派の人々の国家社会主義とは現存の国家――官僚的であり、貴族的であり、軍国的であり、その上資本主義的でもある――日本に生産手段を集中しようとするのであり、それのみならずこれによつて政治的自由主義の諸政党を圧迫せんとする政略から生れいでゝゐるものであるから、彼等の謂ふところの国家社会主義とはビスマーキアン国家社会主義であり、従つてデモクラシー撲滅においての社会主義でめり、（中略）それは国家社会主義ではなくして国家資本主義であるに過ぎない」として高畠素之一派も「軍閥連や官僚一派の国家社会主義論と何等選むところがない」ではないか、と批判する。「理論として、一般的に、階級的諸国家に生産手段を集中することはたゞ国家の専制権の拡大、国家といふよりはそれ等の諸国家の支配階級の手に専制権を拡大することであり、社会の征服被征服の関係を益々明白にするものであり、さ

うして社会主義とは正反対の方向と精神とをもつて生れいでゝゐるものである。然り、国家資本主義と社会主義とは明白にこれを区別しなくてはならない。繰返していへばビスマーキアン国家社会主義なるものは社会主義ではなくして資本主義である。国家資本主義である」そしてそれは社会主義の敵である、といつている（「国家社会主義の批判」）が、これには何人も異論はあるまい。ステート・ソーシャリズムとは「デモクラシーの行はれる国家の手に生産手段を集中することによつてする社会主義」であり、これが真実なる意味における国家社会主義である。それは政治的、社会的、産業的、民主主義の要求であり、社会主義そのものである。この国家社会主義はマルクスおよびエンゲルスによつて提議された。最近ではヴヰルヘルム・リープクネヒトやベルトランド・ラッセルによつても唱えられている。「真実なる意味においての国家社会主義とは民主主義的国家社会主義でなくてはならない。従つてソーシャル・デモクラシーと一致するものでなくてはならない」という（右同）。つまり『批評』の立場が擁護する「国家社会主義」とは今日いうところの「社会民主主義」であつたことがわかる。

六　『批評』がもつとも精力的に紹介したのは「労働階級の前に提供されたもののうちで最も若い生命」であり、「サンヂカリズムよりも、I・W・Wよりも、ボルシエヴヰキ主義よりも、遙に後れて生まれてきた」ギルド・ソーシャリズムであつた（「ギルド・ソーシャリズムとその批判」）。彼等は Bertrand Arthur William Russell や G. D. H. Cole あるいは S. G. Hobson にしたがつてこの新説を紹介した。「産業に対する生産者の統制権を要求するとともにまた国家の存在を承認し且つ生産に対する国家の消費者としての権力を承認してゐるものである」（右同）とギルド・ソーシャリズムを要約し、かくのごとき「ギルド社会主義は世界における労働組合運動及び社会主義運動の新特質となつてきた。特に英国においてその急速の発達を見るのである」（「ギルド社会主義の創生」）と新思潮の紹介に懸命であつた。その力の入れ方については「ギルド派の立場からラッセルやコールの紹介を始めとしてこの方面の紹介と批評のためには多少の貢献をしたと信じてゐます。この意味において『批評』は微力ながら存在の意義のあつたことと信じます。今年に入つてからは一層ギルド社会主義の研究に専念する考へで（ある）。（中略）さうして本号からはこの方面にもつと力を尽す考でこゝに『ギルド社会主義研究』の欄を特設しました。以後引続きてこの研究を行つてゆきます」（「ギルド社会主義研究」）と大正九年二月に言明しているところからもわかろう。

七　次に無政府主義とサンヂカリズムに対する批判をみよう。まず無政府主義であるが、これについては「あまりに人間性の研究に

ついて楽天的である」ことに第一の誤謬があるとし、第二の誤謬として「凡ての無政府主義が政治についてあまりに悲観的であることから出発」している点をあげた。「彼等は人間性についてもつと深刻なる研究を必要とするものであるとゝもに、政治についても、もつと正しき理解に入らなくてはならない。クロポトキンに従へば無政府主義は近づきつゝあります。けれども無政府主義は決して近づきつゝあるものでないのみならず、人間の凡ての歴史は無政府主義の主張に逆行してゐるのを見ます。歴史の永遠に証拠立てゝゐる事実はたゞ一つ――デモクラシーの勝利がこれであります」というのが無政府主義批判の結論であつた（「無政府主義の批判」）。サンヂカリズムについては第一に無政府主義、第二に経済的連立をもつて国家および資本制度にかえる、という二つの点から批判できるとする。すなわちサンヂカリズムで国家とは常に資本主義的または官僚的のものであるとする国家観は感情的であつて合理的根を発見できない。今日の国家が資本主義の国家であつても、明日の国家もまた資本主義の国家であることの理由にならない。「国家をもつて必然的に資本主義または封建主義の機関であるとなすことはたゞ今日、昨日、一昨日の国家にのみ囚はれたる見解である。これをもつて一切の国家の性質を論ぜんとすることは国家の進化史を無視したものであり、それには何等の合理的根拠もない」というのであつた。第二点についてはサンヂカリズムは民主主義をもつて多数決主義、すなわち多数専制主義とみるが、デモクラシーは「多数専制主義ではなくして政治的、社会的、産業的機会均等主義―社会主義、産業的、政治的自由そのものである。従つてデモクラシーをもつて多数専制主義なりと独断してこれに反対しその立場から無政府的経済生活を要求することはこれまた何等の合理的根拠をもつてゐるものではない」としてサンヂカリズムを否定しようとする（「サンヂカリズムの批判」）。

八　その他注目すべき記事を簡単に紹介すれば、第九号においてレーニンの著 The Soviet at Work を紹介し批評した長論文があるが、ここにおいて室伏高信はつぎのように述べていることは注意されてよい。すなわち「能率化の要求は、ニコライ・レーニンに従へば『一人の執政権』に帰着しなくてはならないものである。（中略）彼れは一人の意思に対する服従をもつてデモクラシーの原則に背くものでなくして却つてデモクラシーの高き形式であることを主張してゐる」そしてこの方法をもつて資本主義から社会主義への変転期において不可避のことであると主張しているが、これは「資本主義の害毒と民衆の愚昧とは、少くともロシアにおいては、深くして大なりとはいはなくてはならない」（「レーニンの著書を読む」）と述べていることである。また室伏は別の論文で「ボルシエヴキズム

は低級文明から必然的に生れたところの新低級文明であると解する」ものであるといい、さらに資本主義もボルシェヴキズムも「自らを民主主義と名けてゐるにかゝはらず、鋭敏にして高度に発達した民主主義が、ともに堪ゆることのできない低調な思想である」といつてボルシェヴキズムを批判する（「プロレタリアの独裁政治」）。『批評』はその後期にいたつて英国の詩人で、空想的社会主義者のWilliams Morrisについて多くの紙面をさいていることも書きそえておこう。

また森恪が大陸問題について折にふれて大小の論文を執筆していること、と同時にその第三号から最終刊号にいたるまで裏表紙の内側の三分の二の大きさで毎号「森恪事務所」の広告を出していることも知つておいてよいことだろう。この広告から当時森は東京、大阪、北京、上海、蕪湖、青島の六ヵ所に事務所を構えていたことがわかる。

『批評』総目次

創刊号（大正八年三月一日）

編集局より　〔K生〕

吾等は到処に改革の必要を認む　〔森恪〕

民主主義史論の序　〔室伏生〕

普通選挙運動の人々

時代批評・民主主義と共和主義

新著批評・ヘンダアソン著『労働党の目的』〔K生〕・デュウキー教授『学校と社会』〔K生〕

・普通選挙運動・デモクラシーの諸運動・国際協同及び産業協同へ・ヂョーヂ・バーンスは曰く・労働組合の自由・右党と左党

レビュー、オブ、レビュース・・河上肇氏の『労働運動の使命』〔尾崎士郎〕・若宮卯之助氏の『危険思想の中心としての帝国大学』〔尾崎士郎〕

吉野博士の誤謬を指摘して普通選挙の主義を論ず〔室伏高信〕

リーブクネヒトの著書から　〔室伏生〕

人の批評・・有島武郎〔士郎〕

政治家の頭は古るい

普通選挙論　〔尾崎敬義〕

第二号（大正八年四月一日）

編輯局より　〔K〕

対外的軍国主義、海国主義、殖民的軍国主義、戦争及軍備撤廃問題　〔SO〕

時代批評・新時代運動の精神

・プロパガンダの権利・文化と危険思想・「我が国」の煩悶・社会主義運動

ゴシツプ

デモクラシーの新理想　〔室伏高信〕

文学とデモクラシイ〔田中純〕

『新ライン新聞』を出すまで　〔尾崎士郎〕

マルクスとエンゲルス

ピヨトル・クロポトキン

デモクラシーの人々

新著批評・イリー教授『民主主義の指導』〔室伏生〕・サツク氏『露西亜民主主義の誕生』〔K生〕・マロツク氏『純生民主主義の限度』〔K生〕

デモクラシー

校正室にて

レビュー、オブ、レビュース・・大山郁夫氏『民衆政治と国民文化』〔尾崎士郎〕・『各国のデモクラシー』

デモクラシー研究(一)・・はしがき・ゲツテイスブルグの墓

所に立ちて〈アブラハム・リンコーン〉・民主主義の精神〈アーサア・ヘンダアソン〉・民主主義の将来〈ハルデーン卿〉・『デモクラシイ』なる言葉〈エドワード・カアペンタア〉・戦争と民主主義〈アーノルド・ベンネット〉・民主主義の研究及び宣伝運動〈エッチ・ヂ・ウェールス〉・進め！民主主義〈フエルマン・フアナウ〉〔室伏生〕

第三号（大正八年五月一日）

「批評」より〔K〕

批評・・日本精神と世界精神〔森恪〕・青年亜細亜同盟・民衆の指導・花下の普通選挙・対外硬と対内軟

Bolshevism 漫画

社会主義と民主主義〔室伏高信〕

社会主義の陥穽〔ベルトランド・ラッセル〕

民衆教育と米国の図書館〔官橋藤治郎〕

社会主義民主主義労働運動主義

過激主義とは何んぞや〔K生〕

国家社会主義運動〔△△△〕

レビュー・オブ、レビュース・・デモクラシーの迷惑〔SO〕

編輯室と校正室〔秋花〕

遠吠録

クララ・ツエトキンとロウザ・ルクセンブルヒ〔Clara の父〕

社会運動の人々〔尾崎士郎〕

薫風往来

デモクラシー研究(一)・・社会主義とは何ぞや〔ヂョン・スパルゴウ〕〔尾崎士郎訳〕

新著批評・・レヴアハルム卿「六時間労働其他」・ロッス教授「向上のロシア」〔K生〕

第四号（大正八年六月一日）

「批評」より〔一記者〕

批評・・政治改造と社会改造〔森恪〕・山東問題は成功か〔森恪〕・秘密外交より外交民主主義へ・新聞記者精神の堕落・青年の解放・労働運動の指導

新著批評・・カール・リーブクネヒト『未来は民衆のものなり』〔秋花生〕

遠吠録

現代人物伝(一)・・福田徳三氏〔Demos〕

サミュエル・ゴムパアス

無政府主義の批判〔室伏高信〕

レビュー、オブ、レビュース・・野村隈畔氏『左右田博士の「文化主義」を評す』〔SO〕

マルクス伝＝社会運動の人々(2)〔尾崎士郎〕

一八四八年のカアル・マルクス〔甲野哲二〕

Clara の言葉〔関未代策〕

当世学者気質〔閥外生〕

編輯室と校正室

過激主義と民主主義〔ヂョン・スパルゴウ〕

新著批評・・マクドナルド『戦後の社会主義』

社会主義、民主主義、過激主義著書考

福田博士とソーシャル・デモクラシー〔室伏高信〕

第五号（大正八年七月一日）

「批評」より〔K〕

ヘンダアソン

批評・・急進せよ・「訓練」された新聞紙・言論の自由

新著批評・・ラッセル『社会主義、無政府主義、サンヂカリズム』・ヴァンダアヴェルト『社会主義対国家』・ノルマン・エンゼル『英国革命と米国民主主義』

国家社会主義の批判〔室伏高信〕

過激主義と民主主義（二）〔ヂョン・スパルゴウ　館生訳〕

自由への諸道＝社会主義、無政府主義、サンヂカリズムの批判＝〔ベルトランド・ラッセル　室伏生抄訳〕

心と心の結合〔田中純〕

フエルディナンド・ラサール＝社会運動の人々(3)＝

福田博士とベルトランド・ラッセル　〔尾崎士郎〕
一八四八年のカアルマルクス　〔哲二〕
現代人物伝(一)・吉野作造氏　〔甲野哲二〕
米国婦人労働組合の発達　〔Demos〕
レビュー、オブ、レビュース・・福田徳三博士『解放の社会政策』　〔倉橋藤治郎〕
編輯室と校正室　〔士郎〕
関税問題より見たる支那改革案　〔一記者〕

第六号（大正八年八月一日）

「批評」より　〔森恪〕
Karl Marx 肖像
サンヂカリズムの批判　〔ウキルヘルム・リーブクネヒト〕
編輯室と校正室　〔室伏高信〕
マルクスと社会主義　〔S・S〕
〔ベルトランド・ラッセル　室伏生抄訳〕
社会主義と労働問題　〔T・K〕
マルクスの生涯　〔甲野哲二〕
『批評』総目次と解説

マルクス物語　〔室伏高信〕
ロバアト・オーウエンの社会主義　〔甲野哲二〕
風聞記
過激主義と民主主義(一)　〔ヂョン・スパルゴウ〕
米国婦人労働組合の発達(一)　〔倉橋藤治郎〕
売れる書物
新聞職工ストライキの真相とその批判　〔横井四郎〕

第七号（大正八年九月一日）

「批評」より
Jean Jaurès 肖像
ギルド・ソーシャリズムとその批判　〔室伏高信〕
編輯室と校正室
新著批評・・福田徳三『黎明録』・河田嗣郎『社会問題及社会運動』
労働人格主義　〔ヂイ・デエ・エッチ・コール〕
エンゲルスの人物と其思想＝カアル・カウツキイの著書に拠る＝　〔甲野哲二〕
ロバアト・オーウエンの社会主義　〔室伏高信〕
私の立場
田中博士の『坐食権』を排すの誤謬　〔竹森一則〕
マルクスの生涯(一)　〔ヴヰルヘルム・リーブクネヒト　木蘇生訳〕
トロツキーの新著　〔秋花〕
別所にて
流行児十人（月旦）
社会主義と婦人〈ベーベル著〉
危険区域の人々

第八号（大正八年十月一日）

シドニー・ウエッヴ写真
労働組合主義の批判〔室伏高信〕
第四階級主義　〔ヂイ・デエ・エッチ・コール〕
サボターヂユ　〔室伏生〕
英国炭坑国有問題（報告全文）　〔サンキー　森恪訳〕
米国婦人労働組合の発達(二)　〔倉橋藤治郎〕
社会政策の価値　〔甲野哲二〕

労働代表としての高野博士
政府代表としての鎌田栄吉氏
マルクス資本論〈松浦要訳註〉　〔木蘇穀〕
文芸時評
編輯室と校正室
危険区域(二)　〔尾崎生〕

第九号（大正八年十一月一日）

ベルトランド・ラッセル写真
レーニンの著書を読む　〔室伏高信〕
三角同盟　〔ジー・デ・エッチ・コール　森恪訳〕
ベルトランド・ラッセル　〔K〕
スマイリー
ヘンダアソン
賀川豊彦君　〔哲生〕
労働運動の理論的基礎　〔甲野哲二〕
『労働者問題』　〔室伏生〕
フランスの政治　〔K〕
米国婦人労働組合の発達(四)完　〔倉橋藤治郎〕
『日本改造の意義及其綱領』　〔室伏生〕
諸家の婦人観　〔和田むめお〕
批評社より

國際労働者同盟まで＝マルクスの生涯＝〔ヴヰルヘルム・リーブクネヒト　木蘇生訳〕
ギルド社会主義参考書
編輯室と校正室

第十号（大正八年十二月一日）
フエルヂナンド・ラサール写真
唯心的経済史観の認識論的位置〔賀川豊彦〕
普通選挙史論〔室伏高信〕
ラッセルの教育論〔森　恪〕
福田博士の講演を聴く
ユートピアの労働と其報酬〔甲野哲二〕
ラッセル『社会改造の原理』〔室伏生〕
労働四団体
マルクスの唯物史観＝マルクスの生涯(四)＝〔ヴヰルヘルム・リーブクネヒト〕
『批評』より
福田博士と河上博士

第十一号（大正九年一月一日）
ナショナル・キルヅへ〔室伏生〕
普通選挙史論(一)〔室伏高信〕
非軍国主義論〔賀川豊彦〕
I・W・W主義の研究(一)〔室伏高信〕
批評より
ウエッブよりコールへ〔甲野哲二〕
労働運動と労働運動者〔Z　生〕
英国労働党の主義〔シドニー・エンド・ビアトリス・ウエッブ　森恪訳〕
『大戦に現はれた日本陸軍首脳部の無能』
編輯室と校正室
新著批評・・生田長江『資本論』・山川均『社会主義者の社会観』・堀江帰一『労働問題の現在及将来』〔K　生〕

第十二号（大正九年二月一日）
ギルド・マンの立場〔室伏高信〕
米国の産業会議〔森　恪〕
ギルド社会主義研究〔室伏高信〕
河上博士曰く
国家の職分＝ギルトマンの解説＝〔アーサー・ヂイ・ペンチイ　木蘇生訳〕
河上博士曰く（二）〔大阪毎日より〕
コールの社会主義＝ウエッブよりコールへ（二）＝〔甲野哲二〕
ギルド経済学〔エ・アール・オレーヂ〕
ギルド社会主義と産業管理〔ダヴルユー・エヌ・エウエア〕
クロポトキン研究
普通選挙史論〔室伏高信〕
編輯室と校正室

第十三号（大正九年三月一日）
ギルドマンの社会＝モオリス・レキットの解説＝
中世紀主義への復帰〔アーサー・ジイ・ペンチイ　K・K〕
ギルド経済学（再び）＝生産と消費との関係＝〔エ・アール・オレーヂ〕
小泉信三論〔哲　二〕
スコット・ニアリングに就て〔賀川豊彦〕
米国の産業会議（二）〔森　恪〕
編輯室と校正室
普通選挙史論（四）〔室伏高信〕
売れた書物
中世都市のギルド〔ピイタア・クロポトキン〕
横山雄偉著『参政権のために』

第十四号（大正九年四月一日）
ギルド社会主義の創生〔室伏高信〕
労働組合主義の理想＝ギルド・マンの立場から＝〔甲野哲二〕
中沢臨川著『正義と自由』
労働階級の独裁政治＝カール・カウツキーの著書を読む＝
大正日日講演会〔室　伏〕
芸術と社会主義＝コールの観たるウヰリアム・モリス＝
米国の産業会議(三)〔森　恪〕
編輯室と校正室

第十五号（大正九年五月一日）
モリスの芸術的社会主義＝ギルド社会主義の創生(一)〔室伏高信〕
メーデー＝リイブクネヒトの思出〔ギルド・マン〕

剽窃博士田中萃一郎〔△△生〕
編輯室と校正室
ソレルとマルクス＝サンディカリストの見たるマルクス主義＝
I・W・W主義の研究(一)〔甲野哲二〕
河上肇著『近世経済思想史論』〔甲野生〕
労働組合主義の哲学＝ゴムパースの立場＝〔森　恪〕
ウェッブ夫妻著　山川均荒畑勝三訳『労働組合運動史』
中世ギルドと労働制度〔ピイタア・クロポトキン〕
堀江帰一著『労働組合論』

第十六号（大正九年六月一日）
モリスの芸術的社会主義〔室伏高信〕
最近のベルンシタイン
編輯室と校正室
レニンの国家論〔ギルド・マン〕
米国新組合主義の成立＝I・W・W主義の研究(二)＝〔甲野哲二〕
秋田講演旅行〔室伏生〕

『批評』総目次と解説
レバアハルム卿『六時間労働』〔森　恪〕
堺利彦論〔尾崎士郎〕
ヂ・デ・エッチ・コールとの会見〔ギルド・マン〕
ギルド・マンの失業問題観
ウェッヴの『労働組合主義の歴史』の新版

第十七号（大正九年七月一日）
民主制乎独裁制乎〔カール・カウツキイ　高木友三郎訳〕
隷属か貧困か＝社会問題に対する二つの観方＝〔甲野哲二〕
六時間労働論（レバーハルム）(二)〔森　恪〕

第十八号（大正九年八月一日）
俸給生活者労働組合論〔室伏高信〕
小泉信三君に〔室伏生〕
高畠素之訳『社会主義社会学』・中山啓訳『クロポトキンの経済学説』
ゴッドキンの社会思想〔甲野哲二〕
吉野博士に答へて
六時間労働論（レバーハルム）(三)〔森　恪〕
煽風器
ナショナル・ギルド同盟の原理及目的〔室伏生訳〕
コオルの『ソーシャル セオリイ』を読む〔室伏生〕
川島清治郎『貨幣廃止論』〔甲野生〕

第十九号（大正九年九月一日）
文明の後〔カアペンタア〕
大山郁夫君の民衆文化主義〔室伏高信〕
『ギルヅマン』から
『アナアキスト』から
六時間労働論（レバアハルム）(四)〔森　恪〕
ギルド社会主義の諸著書を一瞥して〔ギルヅマン〕
中沢臨川の死〔室伏高信〕
ナショナル・ギルド問答〔室伏高信訳〕
貧困か隷属か（二完）〔甲野哲二〕
朝日新聞のロシア通信〔山内茂男〕
室伏高信著『ギルド社会主義』正誤表

第二十号（大正九年十月一日）
批評的精神の復活
The Day is Coming〔William Morris〕
レーニン主義批評(一)＝ボルシェビキズムとしてのマルクシズム＝〔室伏高信〕
六時間労働論（レバアハルム）(五)〔森　恪〕
ナショナル・ギルド問答（二完）〔室伏生〕
ギルド参考書讓る
日本のギルド運動〔ギルヅマン〕
木曽節〔翠　雲〕
無産者階級の文化的意義〔甲野哲二〕
クロポトキンの眼に映じた国家共産主義〔K　生〕
伊太利の赤化

第廿一号（大正九年十一月一日）

ゴルギーからウエルスへ

A Free Man's Worship

〔Bertrand Russell〕

プロレタリアの独裁政治＝レニン主義批評の二＝

〔室伏高信〕

ボルシェヰーズム発達の経路

〔尾瀬敬止〕

新聞職工再びストライキ

国際労働標準

〔ヘンダーソン　森恪訳〕

ソリダリテ(一)

〔レオン・ブルジョア〕

ギルド社会主義〔ヂ・デ・エッチ・コール　甲野哲二訳〕

民主主義と直接行動

〔ベルトランド・ラッセル〕

ラッセル来る

第廿二号（大正九年十二月一日）

読者諸君に　〔室伏高信〕

モリス評伝　〔甲野哲二〕

ソリダリテ〔レオン・ブルジョア　百瀬一郎訳〕

ギルド社会主義(二)〔ヂ・デ・エッチ・コール　甲野哲二訳〕

国際労働標準　〔ヘンダーソン　森恪訳〕

ギルド社会主義正誤(一)

社会主義文学――労働文学に対する抗議　〔尾崎士郎〕

追記　初校後、室伏高信氏に教えをうけたところ、「甲野哲二」は加田哲二氏だという。